

地域と学校 その5

ワークショップで検討開始！

小松 尚(名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

いしくれ
石樽小学校の生活科や総合学習の時間では、地域の方々に講師に招いて学ぶテーマがあります。今年
は牛乳(1年生)、茶(2年生)、蚕(3年生)、炭(4年生)、米(5年生)、戦争と命(6年生)です。どれも石樽の
地に深く関係するものです。9月の末には4年生が300本の竹炭を学校の窯で作りました。この竹炭は10月
の学校創立100周年で炭工作の材料に使われる予定です。

では今回は、ワークショップ形式での建て替え計画の様子をお話します。

プロポーザルによる設計者の選定

平成13(2001)年7月から建設委員会が発足し、新しい
学校に対するいろんな思いが話し合われましたが、いよ
いよそれを具体的な形にしていく段階になってきました。
とはいえ、基本的に皆、建築の素人ですので、専門家を入
れてということになり、プロポーザルが行われることにな
りました。

行政の方も、こんな設計事務所に参加してもらいたい
といった思いやアイデアは特になく、実際のところ、町長
の「日本一の学校を!」というかけ声にあわせて、全国の
設計業績一覧から上位8社が選ばれました。地域との共
生、環境の配慮、子どもの生活や学習への対応など、提
案された8社の内容は大きく違いませんでしたが、最終
的には計画のプロセスを重視し、学校づくりのプロセス
まで一緒にデザインしたいと提案した設計事務所が選ば
れました。

選ばれた設計事務所の担当者OyさんとOsさんは当時
30代前半、設計者としてのキャリアが10年程の若手でした。
それまでも学校をはじめ公共施設の設計をいくつか担当
していましたが、特に学校に通じていたわけでもありません。
ですから、二人にとっては「学校とはどんな所?」という根
源的な問いがすべての出発点でした。また、最近でこそ
住民参加による公共施設の設計は増えてきましたが、当



・第1回目の建設委員会の様子
出席者や設計者の緊張感や期待感、不安感が表情から見て取れます。
(石本建築事務所提供)

時はまだ始まったばかりで参考になる事例もあまりありま
せん。事務所で唯一、住民参加で設計した公民館の事
例を横目で見ながら、二人で夜な夜な議論したそうです。

また、時は同じ頃、教育委員会は文部科学省の「コミュ
ニティ拠点としての学校施設整備に関するパイロット・モ
デル研究」に応募し、見事選定されました。この研究は、
地域コミュニティの拠点として学校施設の整備を推進し、
その整備計画の是非を実証的に検証するもので、平成
12(2002)年度からの3か年に全国から19団体が選ば
れました。このうち小学校は9団体あり、石樽小学校は平成
14年度に選定されました。建設委員会の地元メンバーの
反応は、少しでも助成金がもらえるのはいいことじゃない
かという程度でしたが、地域と一緒に計画するという方
針を掲げた教育委員会にとっては渡りに船であり、大き
な弾みになりました。

そしていよいよワークショップによる検討が始まりました。

ワークショップって何?

第1回の建設委員会は平成14年5月11日に行われまし
た。現在の育友会(PTA)から6名、育友会歴代会長3名、
学窓会代表2名、自治会代表2名、教育委員1名、町議員
2名、教育委員会2名、学校から3名、そして設計事務所3
名の24名が会してのスタートです。毎回の建設委員会の
後に発行された「わーくしょっぷだより」(公開議事録)を
見ると、「教育の原点から見つめ直して学校を形にして
いきたい」という意気込みとともに、「ワークショップって何?」
とか「これからどんなふうに進んでいくの?」といった疑問
や不安が見え隠れします。

最近でこそよく耳にするようになった「ワークショップ」
ですが、みなさんは説明できますか?

ワークショップの第一人者である中野民夫氏の説明に
よると、ワークショップとは、「講義など一方的な知識伝達
スタイルではなく、参加者が自ら「参加」・「体験」し、グル
ープの「相互作用」の中で何かを学びあったり創り出したり
する、双方向的な学びと創造のスタイル」です。そして
ワークショップを行う最大の意義は、当事者意識が高まる
ことだと言われます。

ワークショップが目される背景には、これまでのように
トップダウン式で方針を決めて実行するピラミッド型社会
から、ボトムアップ方式で知恵を集結しながら、蜘蛛の巣
や織物のように人々をつなぐウェブ型(ネットワーク型)社
会への転換があると言われています。これを今回の石樽
小学校の建て替え計画に置き換えれば、これまでの行政
主導の学校施設の建設から、学校と地域の協働による
広い意味での学校づくりへの転換と言えるでしょう。

新鮮な驚きで始まった検討

第1回の建設委員会では、OyさんとOsさんからこれか
らの進め方、つまりワークショップでの進行方法につい
ての説明がありました。その時、2人からは今回の計画に関
する考えだけが提示され、これから一緒に思いや希望
を形にしていくことが確認されました。今振り返ると、この
ことは地域の人々を前向きにさせたようです。学窓会代
表のMkさんは、自分たちは何ができるのか疑問だった
そうですが、その話を聞いてやるべきことが見えたと言
い、昭和50年竣工のRC造校舎の建設に奔走したHkさん
もこの方法に驚きつつも高い評価をされました。

また別の意味で新鮮な驚きを感じていた人がいました。
委員長のOtさんです。設計事務所の2人は今回の計画
に臨むにあたっての考え方を説明する冒頭に、これか
らの学校に求められる教育のありかたや子どもの視点に立
つという考えを語りました。それは、「『共育』『協育』『強
育』の3つを目指す学校にしたい」という提言だったの
ですが、Otさんの驚きとは設計事務所が建物の形や強さ
だけでなく、そういうことまで考えているのかということ
でした。我々建築設計の関係者は、建築の直接の使われ
方やその背景にある思想、歴史にまで思いを馳せて設計
するのは当然だと思っていますが、一般の人々にとつて
は意外なことだったようです。

ちなみに『共育』『協育』『強育』に関しては、第2回
建設委員会で『興育』や『郷育』、『鏡育』に『今日育』
もあるぞ!という意見が出てきました。2回目にして既に
中野氏のいうワークショップらしくなってきたと言え
そうですね。

言葉と意思のキャッチボール

第4回までは具体的な建築の計画や設計につながる
議論はせず、先進事例のスライドを見たり現地視察を
行いながら、自由な意見交換やアイデア出しを行いました。

第2回のわーくしょっぷだよりには、1時間30分間の
議論で31の意見や希望が出たことが報告されています。
私の経験からも、この段階でどれくらいアイデアが出
せるか、また意見交換という言葉のキャッチボールを
通じて参加者同士の思いを織物(ウェブ)のように編む
ことができるかは、検討の場のその後の行方を左右し
ます。往々にして設計事務所に「早く絵を描いて見
せてほしい」という意見が出てくるのですが、この建設
委員会ではそういう



・わーくしょっぷだより
毎回の議論の内容を整理したもの。熱気が伝わってきます。
(石本建築事務所提供)

ことはありませんでした。少しずつ、自分たちで考
えて決めるんだという雰囲気が生まれてきたの
かもしれません。

ただ、このころの建設委員会の様子についてメン
バーの方にインタビューすると、初めてのこ
とだったので皆さん戸惑いがあったよう
ですが、でも石樽の会合は他もこんな
感じだよという声も複数の方から聞
きました。以前は教頭として赴任し、
平成15年からは校長として石樽小
学校に着任したKs先生も、このワ
ークショップ方式の建設委員会には
違和感がなかったと言います。そ
うなると、石樽の会合は以前から
ワークショップ的だったのかもしれ
ません。確認する術はありませんが。

しかし、設計事務所の二人は必死です。なにぶん、
ワークショップそのものを運営する
方法や、それによって建築の設計を
まとめるために参考にできるもの
はありません。事前の準備と議論を
円滑に進めるための小道具を用意
周到に準備していましたが、毎
回手探りの中で建設委員会に向か
っていたと言います。時には準備が
間に合わず、近鉄富田駅から乗る
三岐鉄道の電車の中で最後の準備
をしていたこともあり。私も何度か
、見るに見かねて手伝ったもので
す。

その頃の事を尋ねると、二人は「
地域の人々が大事にしたいと思っ
ていることをきちんと受け止め、建
築にしたいと思っていた」という返
事でした。とはいえ、進行が上手
かいかかわらたらどうしようとい
う心配もあまりなかったし、ワー
クショップをどうしたらいいかな
ど知らなかったことは、意外に良
かったのかも...と。なんて楽観
的だったの?と思うのは私だけ
でしょうか。

さて、こうして始まった建て
替え計画は、いよいよ具体的な
検討に入っていきます。

〈参考文献〉

中野民夫氏『ワークショップの基礎』名古屋大学大学院
環境学研究科・三菱UFJリース寄付講座(2007年6月12日)
資料